

シュニッツラーの作品における「男性的なるもの」

斎藤 昌人

(高知大学生涯学習教育研究センター)

Die Männlichkeit in Werken Arthur Schnitzlers

Masato SAITO

(Center for Education and Research in Lifelong Learning)

Renate Möhrmann は、シュニッツラーの作品に描かれている女性像を総括する中で、「女を『高尚な』あるいは『劣った』存在へと二分化する志向、中世に始まり、20世紀のドラマにも続いているような、徳と悪徳の二元化」はシュニッツラーの描く女性には確認できないとしている。「静かに家を守る貞淑な主婦」と「そのデモーニッシュな対」となる「妖女、男殺し」、つまり「世紀末の芸術、舞台そして文学の領域で知られていたような」、「男の空想の産物」としての女性シュニッツラーの作品には登場しないというのである。¹ また、Nike Wagner は、世紀末のセクシュアリティを論じる文脈の中で、「男性が作り出す女性像に従って女性の現実が形作られる」²とし、同じように、「か弱い女性」と「妖婦」への女性の単純化・類型化を語り、³ただシュニッツラーだけがそのような類型化を超え、「ある特定の『女』理論ではなく、『実践』に従って（女を）形成し」、「その描き出す女性は真実に近い」⁴としている。確かに、Möhrmann や Wagner が言うとおりのシュニッツラーの作品に登場する多くの女性はそのような類型化を免れ、より現実に近い存在として描かれているかもしれない。しかし、必ずしもそのような多様性の中で描かれてはいない女性もシュニッツラーの作品に登場するのも事実である。

また、Jenneke A. Oosterhoff は、「女の謎」を解こうとする世紀転換期の性科学上の試みに、女性の精神上的「劣位」を肉体面から導き出そうとする男性理論家の傾向を見て取り、「男性のセクシュアリティの完璧さが崩壊してしまうことへの不安、そしてその完璧さによってすべては秩序の枠内に治まっていることを証明するため、女性性は男性性の劣った派生物として分析され記述されるのだ」⁵としている。そして、Rosa Mayreder の言葉を引用する形で、「近代の男性性において秩序通り機能していないもの、それは Mayreder によれば、『自分と別の時代の男とのあいだに男性性の程度において違いがあって然るべきだ』という考えに男が耐えられないという事実だ」⁶とし、さらにそのように男性性が問題にされる背景を次の一言で端的に語っている。それは、「女性的になった男たちが増えてきたことへの不安」⁷なんだと。

これらの点を踏まえた上で、本稿では、類型化された女性という、ある意味シュニッツラーの描く女性の中で異質とも言える存在そのものにスポットを当てるのではなく、そのような女性像を描く中で、逆に浮かび上がってくる男性性を問題にしてみたい。

1

シュニッツラーの描く女性像は、知られているように非常に多岐・多様にわたる。しかし、女性がいかに描かれているか、あるいは描かれていないかとの絡みの中で、逆に男性性を問題にしようとする本稿の意図を考えた場合、シュニッツラーの作品で描かれる多くの女性をリストアップし検証

することはある意味必要のないことであり、また本稿の手に余るところでもある。従って、本稿はある特定の状況下における男女間の問題に焦点をあて、その中で先に述べた課題に近づくことにする。その特定の状況とは不倫である。

Ute Frevert は、近代の性差を論じる中で、夫の不倫と妻の不倫、その不平等性に触れている。「三月前期に刑法法規集について考えたとき、妻の側の不倫は夫の側の不倫よりも厳しく罰せられるというのが衆目の一致するところであった」⁸ のであり、それは、「妻の意味は主として道徳的かつ性的純潔さにあり、その喪失とともに、女性の威厳並びに結婚生活と家庭の平和も失われてしまう」のにたいし、「夫の側の不倫によっては、多くの場合家庭の名誉も平和も損なわれてしまうことはない」⁹ と考えられていたからである。このような考えは、三月期以降、表向き法的なレベルでは効力を失ってしまったが、もちろん20世紀に至るまで一般的には広く受け入れられていたのである。

さらにまたそこには、ブルジョアジーの台頭とともに、とりわけ19世紀を通して強力に形成されてきた性差の問題も絡んでくる。つまり、女の側の不倫に特に問題があるとするなら、それは「男性は不倫によって女性ほどは墮落しない。なぜなら男性には活動と努力という別の領域が存在するからである。女性はより墮落する。なぜなら母として、そして妻としての女性の使命が至高のものだからである」¹⁰、つまり公的領域と私的領域の分離の中で、女性には私的領域が割り振られ、男性には公的領域での活動性・行動性が求められていたことにもよるのである。

そのような点を踏まえた上で、シュニッツラーの散文作品の中で多数描かれている「不倫」の中からいくつかのものを取り上げてみよう。

まず取り上げる作品は、“Ein Abschied”である。そこでは不倫相手の恋人を自宅で待つ男性の姿が描かれている。もちろん、「二人の関係はひっそりと続けられ、二人が知り合いであることは誰一人にも知られてはいけない」(ES I, 240)¹¹ のである。Wagner は、シュニッツラーの作品は現実に近い女性を描き出すとする先の文脈の中で、その例として、密会の事実が夫にばれることを恐れる余り、事故で死んだ恋人を放置する Emma を主人公とする “Die Toten schweigen” をあげている。¹² とりわけ、妻の不倫は夫の不倫よりも罪が重いとされていた当時の状況を考えると、女は夫の目を盗んで男に会いにくるのであって、男はそれを自宅で待っているしかない。手紙のやりとりもできず、ただ、それが可能なら、毎日午後の三時から七時のあいだに訪れてくるということが二人のあいだで了解されているだけである。男は、その時間自宅にこもって、ただ待っているだけである、女がやってくるという保証もないまま。あてのないまま待つ時間は、「男の神経をすり減らし」、「どんな活動も手につかないまま、ゆっくりと男の身をむしばんでいく」(ES I, 239) のである。

Oosterhoff は、そのような待つ身となった男の姿を取り上げ、そこでは従来の男女関係が逆転するとしている。女がイニシアティブを取り、男はそれに従うしかない。そして、「自分自身の生活のすべてを不倫相手の女性にゆだねてしまう」ところにその逆転の象徴的現象を見ている。¹³ 確かに Oosterhoff の言うとおりの待つ身という観点で見た場合、男と女の立場は逆転している。しかし、女と知り合う前の自由な時間にあこがれながらも、なお「彼女から逃れることができない、なぜなら彼女を愛しているから」(ES I, 240) と考える男の姿は、単に男女関係の力学の逆転という観点でのみ捉えることができるものだろうか。

その前にこの時代の男女を巡る言説を確認しておこう。シュニッツラーが生きていた時代はとりわけ性科学等を背景にして、性を巡って盛んに語られていた時代である。もちろん、それを語っていたのはほとんど男性であり、その多くは男女間の二元論の枠組みの中に捕らえられている。それは、劣った性としての女を強調することによって、相対的な形で男を高めようとするものである。先に触れたように、そこには、自分たちが他の時代の男性よりも劣っているかもしれないというこ

とへの恐怖があり、さらにその核心部分には、「男性性」の崩壊への危機感があるとされている。では、崩壊の危機にさらされていただけ、当時なおいっそう強調されていた「男性性」とはどのようなものだろうか。帝国主義の時代と相まった力への志向、さらにブルジョワジーの台頭、会社社立の時代を背景とした活動性や積極性や行動力。それらがこの時代しきりに強調されているのである。¹⁴

さて、それを踏まえた上でこの作品に戻ろう。身を焦がす男は、活動的たれという男らしさの枠組みからは遠く離れている。それを、シュニッツラーを現実にくぐめく人間を何のフィルターも通さず、その多様性の中で描き出しているとして、男らしさの枠組みからずれた男性が存在する証として片づけることは容易である。しかし、この男は、そのような男らしさの枠組みからはずれていないだけではない。規範というものがあつて程度規制力を持っているとするなら、ここでは男らしさの「規範」はどんな拘束力も有してはいない。女を待ち続ける男の姿は、ほとんど妄想・狂気の域に達し、それを抑えるどのような力もここでは描かれていない。確かに、そのような男の姿を精神が病んでいるとして片づけてしまうことは容易である。しかし、自らの感情を抑制するというのが「男らしさ」の一つの表れであるとするなら、この男の中ではそのような男らしさはそもそも全く機能していないのである。

それはまた、別の観点から見ることでもある。つまり、この男に「男らしさ」や活動性が見られないとするなら、それは「愛」や「性」がそこまで強力に男性をとらえているからともいうことができるだろう。しかし、その時代「男性性」の一要素とされていた公的領域での活動性という規範から逸脱し、私的領域における愛に身をやつしているとするなら、それもまた男らしさの規範から大きくずれていると言えるのではないだろうか。

そのように、この作品で描かれている男は、二重の意味で「男らしさ」から逸脱している。しかし、その逆転は最後のシーンで再び元に戻り、一見女の側に位置づけられていた男が男の側にまた戻ってくる。そのとき、少なくとも作品を通して描かれていた待つ身としての男、男性性という概念のもとで類型化された存在とは異なる、個としての男は消滅してしまう。病で死んでしまった女がベッドで横たわっている姿を目にしたとき、男は涙がこみ上げてくるのを感じる。そして、「熱い、燃えるような痛みを胸に覚え、叫び、そして彼女の前にひざまずき、その手にキスしたくなる。」(ES I, 253) しかしそのとき、男は女の足下に跪きその手を握りしめている夫の姿に気がつく。そして、夫は男の手を握りしめ、「ありがとう、ありがとう」と声を絞り出すのである。そのとき、男の中では何かが醒めていく。「ある種冷たい注意深さで女の顔を観察」し、「涙はすっかり涸れ」、「胸の痛みは、突然空虚で実態のないもの」になったのである。そして男は立ち去ろうとするが、今は遺体となって横たわっている女が微笑みを浮かべ、自分に語りかけているように思われる。

そしてその語りかけてくるような微笑みは突然、軽蔑を浮かべた見慣れぬものとなった。そしてその微笑みは次のように語っていた。私はあなたを愛した、なのに今あなたは見知らぬ男のようにそこに立ち、そして私を否定している。あの人に言って、私はあなたのものって、このベッドにひざまずき、私の手にキスするのは、あなたの権利だって。それをあの人に言って。どうして言わないの。(ES I, 253)

そして男は、彼女の微笑みから目を反らし、その場から静かに立ち去る。心身ともすり減らすまでに男を捕らえていた女への激しい思い、その狂気に近い領域からこの醒めた有り様へと突然男を変えてしまったものは何だろうか。妻の不倫に気がつかず、あろうことかその不倫相手の男に感謝の言葉を述べる夫の無知さに気づくことによって、激情にとらわれていた自らを逆に意識できるよ

うになったからか、あるいは、妻の裏切りを知らぬまま妻を愛し続け、その遺体のもとで涙を流している男への同情からなのか。いずれにしろ、「男は女を否定」したのである。それによって、夫を裏切った妻の不倫の共犯関係とされていた男は、夫の側に立つ。そしてそのとき、不倫を働いた妻だけがひとり罪の網の目の中に取り残されるのである。

そのように見た場合、この作品は一見したところ男らしさの枠組みからずれた男を描きながら、その構図は最終的には当時の男女を巡っての二元論的な枠組みの中に収まってしまっている。女の罪を際立たせることによって、そのような展開は、不倫をあつかったまた別の作品“Die Frau des Weisen”でも描かれている。

2

描かれているのは、教授のもとに下宿していたギムナジウムの一生徒と教授の妻とをめぐっての関係である。Oosterhoffによると、この教授の妻は、「世紀末の時代において典型的な二つの姿」¹⁵で描かれている。つまり、「母性」を核とした品行方正な優しい女という側面と、男を誘惑する魔的な側面とである。実際そのあたりのことは、作品では次のように描かれている。アビトゥアに合格し、教授の下を離れることになった日、荷造りをしている生徒のもとに妻がやってきて生徒に突然キスをし抱きしめることになる直前、この生徒は、「もはや母性的なものは何一つ感じられない優しさ」(ES I, 269)をこの妻に感じているのである。母性を象徴していたような存在から、男を誘惑する性的な女性への突然の変身、その中で生徒は幸せを感じているのである。ここでもまた、働きかけるのは女性というふうに、従来の男女の力学は逆転している。しかし、結局この関係はどこにも発展していかない。夫がその現場を見たからである。ただし、現場を見られたことに気がついたのはこの生徒だけで、妻はそれに気づかず、そして夫は何一つ気づかなかったふりをしてその場を立ち去るのである。もっとも、妻のほうも夫の足音を聞いた気がして、生徒をすぐに家を後にするように命じるのだが。

ある意味、その光景が作品の結末部分の伏線となっている。それから七年後、とある保養地で偶然この元生徒と妻が出会うのである。元生徒は、教授と妻のあいだに子どもがいることを知り、「二人がまた和解した」(ES I, 266)と確信するのである。ところが、そのとき二人のあいだで交わされた会話の中で、二人が抱擁している現場を見た夫が、そのことを一言も言わぬまま、妻とのあいだでそれまでの生活を変わることなく続けていたことが明らかになる。そして妻は何一つ知らぬまま、この七年間夫との生活を続けてきたことが。

彼(教授)は、・・・彼女に何一つ言わなかったんだ。そして、彼女の傍らで生きてきたんだ、一言も言わずに。彼女を赦したんだ — そして彼女はそれを知らないんだ。(ES I, 275)

その事実を認識したとたん、元生徒の彼女への思いは一変する。というよりも彼女の存在そのものが一変するのである。「かつて愛していた女性から、見知らぬ女性」(ES I, 275)へと。そしてそのとき変わったのは彼女への見方だけではない。「私のために、彼女がどれほどのことを耐えてこなくていけなかったのか、そしてひょとして今なお耐えていなくていけないのか、私には全く想像することができない」(ES I, 266)と語り、彼女の痛みを共有しようとした彼女への思い、そしてその思いを抱え込もうとすることに費やされたエネルギーそのものが空しいものとなってしまふ。それは、そのエネルギーが激しいものであっただけに、「この女は誰」(ES I, 275)という疑問となっていつそう際だってくるのである。

さらに、ここでは無知な彼女の姿とすべてを抱え込んで持ちこたえようとする男の姿が対照的に描かれている。そして、この元生徒は彼女の無知を認識したとたん、彼女の夫を思い出すのである。妻の裏切りの現場を目にしながら、その後の妻との生活の中でそれに気づかなかったふりをし続ける、つまり彼女を赦した夫の姿を、感情をコントロールする男と感情に動かされるままに動く女。

そのように見てきた場合、この作品は、先に見た“Ein Abschied”と同様、誘う女と誘われる男という男女の関係が逆転した構図を描きながら、最終的には元生徒が、夫に親密感を感じることにによって、男性性が肯定的なものとして強調されるようになっている。すべてを知った上で妻を赦す男と、赦されていることすら知らないその女を軽蔑する男という形で、それによって“Ein Abschied”の女と同様、この作品の女も意図するとしないとにかかわらず、否定的な相を帯びてくるのである。

3

さて、次に取り上げる作品“Erbenschaft”は、先の二つの作品同様、不倫というテーマを扱っているが、また異なった側面を見せている。それは、先に取り上げた“Ein Abschied”や“Die Frau des Weisen”では、夫-妻-恋人という三角関係が、最終的には崩壊し、「女」を否定することによって「男性性」の優位が結果として際だってくるのに対し、この“Erbenschaft”においてはその「男性性」がまた異なった形で強調されてくることによる。

ただし、誘う女という構図は先の作品といっしょである。不倫相手の若い男性と夫妻が昼食を食べた後、夫が眠り込んでしまうと、妻は「微笑みを浮かべて立ち上がる」のである。

彼女はつま先立ちで、庭に続いているドアへと急ぐと、エミールに目配せした。彼女が先を行き、男は彼女にゆっくりとついて行く。見ると、彼女は大きな二本の木に渡されたハンモックに横たわっている、はれぼったい唇、潤んだ瞳、求めるような息づかいで。(ES I, 18)

“Die Frau des Weisen”と同様、誘う妻という構図の背景には、夫が年老いているという事実が見え隠れし、それだけいっそう妻の性的部分が際だってくる。そのような、ある意味的脅迫観念にとらわれた男性たちの姿は、当時の社会的文脈の中に置くこともでき、非常に興味深い問題もはらんでいるが、それに関してはここでは触れず、先に取り上げた二つの作品と同じ文脈の中で見ていこう。確かにここでも妻のAnnetteは、「少女のような外見」¹⁶で描かれると同時に、性的欲望に身をゆだねる女性として描かれていて、当時の女性を巡る言説の二極化が端的に描かれている。そしてそのような、ある意味無知で無垢な性的存在としての女性という側面が描き出されることによって、先の二作品では男性性が相対的に浮かび上がってくるのに対し、この作品ではそのような否定的に描かれた女のありようそのものがひとつの契機となって男の優位性が際だってくるわけではない。どのように描かれようと、女の存在そのものはここでは何の機能も果たしていない。ただ、男の論理が一人歩きしているのである。決闘という形で、もちろんそこで問題になってくるのはただ「男の名誉」だけである。

私の、……あの死んだ女が埋葬されるときに、彼女の二人の男がまだ彼女の墓前で涙を流す可能性を持っているとするなら、それは私の道徳的感情を傷つけることになるだろう。私はあなたにそう言うっておかなくてはいけない。(ES I, 20)

「道徳的感情」といったとき、妻を寝取られた男を決闘へと駆り立てているのが、妻個人への感

情ではなく、社会的に形成され、ひとつの規範となった「男性性」への強迫観念であることが見え隠れしている。

ただしシュニツラーは、決闘を申し込む側の男、そしてそれを受ける側の男、その二人の男性性の実態がどのようなものであるかを次のように描いている。つまり、年老いた夫が流す「大きな汗の滴」(ES I, 20)からは、この男が決闘という行為に向かうことそのものにかかなりの無理があることがうかがわれるし、またそれを受ける側の男も表面的には「冷静さを取り戻すことに成功」(ES I, ebd.)するが、その裏ではかなり動揺していることが明らかにされる。手をつけていないコーヒーがまだ温かいことに驚き、それによって時間的感覚が麻痺していること、そしてまだ燃えている煙草に新たに火をつけようとすることによって、その冷静さが見せかけのものであることを図らずも明らかにしてしまっている。そして実際のところ、「彼は、心臓がどれほど脈打ち、足がどれほどふるえ始めているかを感じていた」(ES I, 21)のである。

だからといって、この作品で描かれている「男の名誉」そのものが必ずしも否定的なものとして描かれているというわけではない。すでに「男の名誉」という概念に、現実の実態が伴わなくなっていることは見て取れるにせよ。確かにこの二人の男は決闘の無意味さに気づいているかもしれないし、実際決闘を受ける男は、次のように死への恐怖を露呈している。

明日、と一瞬彼は考えた。そのとき、自分にとって明日はもうないのかもしれないという思いが彼の脳裏をよぎった。(ES I, 21)

ただ、そこまで追いつめられながら、なお決闘を受けるとするなら、それによって浮き彫りにされてくるのは決闘を一つの頂点とする男の名誉という概念の無意味さではなく、むしろ、その概念が逃れられないものとしてまだ社会的に強固に機能しているという事実であろう。

4

さて、最後に取り上げる作品“Der Witwer”は、先の三つの作品同様不倫をテーマにしながら全く独自の展開を示している。ストーリーは、妻の死後、その手紙を見ていた夫が妻の不倫を知ることになるというものである。しかも、その相手は自分の無二の親友である。妻の不倫を知った夫の比較的長いモノローグが作品には置かれ、それは、自分の妻が結局のところ性の欲望に身をゆだねざるを得ない女という存在であり、親友はそれにあらがおうとし、自らと闘い、そこから身を解き放とうとしたが、結局のところ妻に思いを寄せるようになり、苦しんだんと、妻の不倫相手たる親友の苦悩を共有するかのよう描かれ、ここでも性的欲望をコントロールできず、感情のおもむくままに行動する女と、感情を抑制しようと苦悩する男という対比の中に女と男は置かれている。そしてその中で主人公の思いはさらに次のように展開していく。

そしてある奇妙な感情が彼のうちで湧き起こってきた。最初は彼自身ほとんど理解しようとはしなかったが、深い穏やかさが、この男への深い同情の念が、惨めな激情が運命のように襲いかかり、この瞬間、ひょっとして、いや、きっと、自分自身よりも苦しんでいる男への。愛していた女性に死なれ、そして自らだまし続けた親友の前に歩みでなくていけないこの男への。(ES I, 235)

女を性的存在へと矮小化することによって、「友情」にすり寄っていく男。そしてその中で、自

らをだまし続けたはずの親友の苦悩に対して共感を示すとするなら、その共感にある意味支えているものは、その親友が妻を愛していたという思いである。そして、その親友に実は昔から婚約者がいて、にもかかわらず妻との不倫を続けていたということが明らかになることによって、親友が妻を愛していたという思いが妄想に過ぎなかったことがわかった時、彼の態度は一変する。不倫の証拠となった手紙を両手であたりにまき散らしながら、「恥知らず、と彼は叫び、そしてその顔に手紙を投げつけるので」(ES I, 238) ある。

ここでは、女を否定することによって、意図するとせざるとに関わらず男性の優位性が際だってくる“Ein Abschied”や“Die Frau des Weisen”，あるいは決闘へ向かうことによって、形骸化されたなかでもなお生き続けている男性的概念の強固さが示される“Erbenschaft”とは異なり、不倫相手の親友を赦すという相対的な形であるにせよ、妻の過ちそのものを赦そうとする心の動きを見て取ることができる。そこに愛があればという条件のもとで、「愛」が私的領域に割り当てられるものであるとするなら、男の公的領域に割り当てられた決闘を考慮せず、公的領域における「名誉」も回復しようとせず、「愛」を念頭に置くこの主人公が示す心の動きは、ある意味、従来の男性概念から逸脱した新たなものであるかもしれない。

結びにかえて

これまで四つの作品をとりあげ、相対的な形で浮かび上がってくる男性像を検証してきた。女の罪を際立たせる形で強調される感情を抑制する男たち、社会的に形成された名誉という概念の強固さの中で決闘におもむいてしまう男たち、そして友情との狭間で苦悩しながら、感情を押し殺すためにかろうじて「愛」にすがろうとする男。一見したところ、シュニッツラーは、MöhrmannやWagnerが語るのとは逆に、男たちを現実の多様性の中で描いていると言えるかもしれない。しかし、男たちがどのように語ろうと、一つの点において男たちは同じ土壌で語っている。つまり、赦すのはあくまで男であり、女はただそれを聞くだけだという一点においては、女は何一つ語らず、男が男の世界で問題を語り、そして解決するのである。

Möhrmannは、シュニッツラーは「女性の欲望と願望をその生物学的観点からのみ導き出すのではなく、社会的・個人的そして生物学的な要素の複雑な絡み合いの中に位置づけ」たとし、シュニッツラーを「女性の弁護人」として評価する。¹⁷確かに、多くの作品にそれは当てはまることかもしれない。しかし、ここで取り上げた四作品では、女性は多様な現実との関連の中で語られるのではなく、むしろ性的存在へと単純化・矮小化されている。それはまた、今見てきたように、当初個としての側面を見せながら、結局のところ当時の性差の枠組みを越えることなく、「男性性」の概念のもとで単純化されて描かれた男性との絡みの中で語られなくてはいけないだろう。

注

- 1 Renate Möhrmann: "Schnitzlers Frauen und Mädchen. Zwischen Sachlichkeit und Sentiment" in: *Akten des Internationalen Symposiums "Arthur Schnitzler und seine Zeit"* hrsg. von Giuseppe Farese. Bern, 1985. S.94
- 2 Nike Wagner: "Geist und Geschlecht. Karl Kraus und die Erotik der Wiener Moderne" Frankfurt am Main, 1982. S.133
- 3 Ebd., S.138
- 4 Ebd., S.137

- 5 Jenneke, A. Oosterhoff: "Die Männer sind infam, solange sie Männer sind. Konstruktionen der Männlichkeit in den Werken Arthur Schnitzlers" Tübingen, 2000. S.14
- 6 Ebd., S.16
- 7 Ebd., S.16
- 8 Ute Frevert: "Mann und Weib, und Weib und Mann. Geschlechter-Differenzen in der Moderne" München, 1995. S.182
- 9 Ebd., S.182
- 10 Ebd., S.183
- 11 Arthur Schnitzler: "Gesammelte Werke. Die erzählenden Schriften" Frankfurt am Main, 1981
- 12 Wagner, S.137
- 13 Oosterhoff, S.48
- 14 「男性的概念」の強調に関しては、たとえば Wagner, S.150ff., ジョージ・L・モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』(柏書房, 1996), トーマス・キューネ『男の歴史』(柏書房, 1997), スティーブン・カーン『肉体の文化史』(法政大学出版局, 1989) 等を参考にした。
- 15 Ebd., S.54
- 16 Ebd., S.53
- 17 Möhrmann, S.106

また、Wagner も同じような文脈で次のように述べている。「ほとんどシュニッツラーだけが現実に近い女性を作り出したのは、彼が愛の法則の多様性を見抜き、それを名誉や社会的役割と結びつけたからだ」(Wagner, S.137)

平成15年 (2003) 10月1日受理

平成15年 (2003) 12月25日発行